

帝都モノガタリ

『深淵に臨み、

花卉を摘む如し』

本シナリオの内容は虚構である。
現実のいかなる人物、団体、その他の
ものと一切の関係はない。
本シナリオでは大正という時代、文化
を扱っているため、現代において差別
的な表現となるものが含まれているこ
とがあるが、差別の肯定、助長する意
図は決してない。

目次

| | |
|--------------------|--------|
| はじめに | - 3 - |
| キーパー向け情報 | - 3 - |
| シナリオの概要 | - 3 - |
| 特殊な探索者 | - 4 - |
| 職業：女学生 | - 4 - |
| さらなる若年の探索者 | - 4 - |
| シナリオの背景情報 | - 4 - |
| イステの歌 | - 4 - |
| 探し求めるものの催眠術 | - 5 - |
| 探し求めるものが見せる光景 | - 5 - |
| 催眠術の流行 | - 5 - |
| 桜嶺女学院 | - 5 - |
| 登場人物(NPC) | - 6 - |
| 島原四辻、本当の最初の被害者 | - 6 - |
| 荒木佑、最初の被害者 | - 6 - |
| 宮本庫子、『お姉さま』 | - 6 - |
| 高蔵寺瞬、佑の親友 | - 7 - |
| 月ヶ瀬七瀬、『探し求めるもの』 | - 7 - |
| 真田幸、新任の教師 | - 8 - |
| 小幡とら、目立ちすぎる新入生 | - 8 - |
| 桜小路那岐、女学院の理事 | - 9 - |
| プレイの準備 | - 9 - |
| シナリオのシーケンス | - 10 - |
| 桜嶺女学院地図 | - 11 - |
| 1：導入部：深淵の恐怖 | - 12 - |
| 1-1：桜嶺女学院前の事故 | - 12 - |
| 1-2：翌日、事件の記憶 | - 12 - |
| 2：桜嶺女学院にて(前半) | - 12 - |
| 2-1：被害者、荒木佑について調べる | - 13 - |
| 2-2：関係の女生徒から話を聞く | - 13 - |
| 宮本庫子 | - 13 - |
| 高蔵寺瞬 | - 14 - |
| 小幡とら | - 14 - |
| 2-3：真田幸から話を聞く | - 15 - |
| 2-4：シスター七瀬から話を聞く | - 15 - |
| 3：島原四辻を調べる | - 16 - |
| 3-1：四辻の実家を訪ねる | - 16 - |
| 3-2：四辻の部屋 | - 17 - |
| 寄木細工の宝石箱 | - 17 - |
| 四辻への手紙 | - 18 - |

| | |
|---------------------|--------|
| 四辻の日記 | - 18 - |
| 『Song of Yste』の研究資料 | - 18 - |
| 4：『Song of Yste』 | - 19 - |
| 5：ミルクホール『ルビコン』 | - 19 - |
| 6：桜嶺女学院にて(後半) | - 20 - |
| 6-1：関係者の様子 | - 20 - |
| 宮本庫子 | - 20 - |
| 高蔵寺瞬 | - 21 - |
| シスター七瀬 | - 21 - |
| 6-2：真田に英和辞典を返す | - 22 - |
| 6-3：女学院の理事、桜小路那岐 | - 23 - |
| 7：銀座の密会 | - 23 - |
| 8：深淵に挑む | - 23 - |
| 8-1：如臨深淵(深淵に臨み) | - 24 - |
| 8-2：如摘花卉(花卉を摘む如し) | - 24 - |
| 8-3：辿り着いた先には | - 26 - |
| 8-4：『探し求めるもの』を殺害する | - 26 - |
| 8-5：『探し求めるもの』を追放する | - 27 - |
| 9：結末 | - 27 - |
| 9-1：消えたシスター | - 28 - |
| 9-2：狩りは終わらない | - 28 - |
| 9-3：深淵はより暗く | - 28 - |
| 9-4：それぞれのその後 | - 28 - |
| 宮本庫子 | - 28 - |
| 高蔵寺瞬 | - 28 - |
| 小幡とら | - 28 - |
| 真田幸 | - 29 - |
| 10：正気度の報酬 | - 29 - |
| 11：シナリオを変更する指針 | - 29 - |
| 舞台を変更する | - 29 - |
| 時代を変更する | - 29 - |
| 『探し求めるもの』を変える | - 29 - |
| 参考資料、その他 | - 30 - |
| あとがき | - 30 - |
| 奥付 | - 30 - |

『深淵に臨み、花卉を摘む如し』

like plucking a Flower on the edge of an Abyss

暗い深淵を楽しみながらも、自分を見失わないように用心していた――

深淵を抜け出せば、穏やかな青い空と、こうした現実について考えたこともない世界が、常に見いだせるのだから。

――ロバート・W・ロウンデズ『深淵の恐怖』より

はじめに

本シナリオは『Call of Cthulhu 新クトゥルフ神話 TRPG』に対応したシナリオである。1~4人の探索者向けにデザインされており、プレイ時間は探索者の作成を含めずに2~4時間を想定している。いわゆるシティアドベンチャーとなるが、小規模な戦闘が発生する可能性もある。

シナリオの重大な情報が旧版(6版)に存在するため、キーパーには旧版マレウス・モンストロルムも必要だ。

罫線(一・一)で囲まれた部分はプレイヤーに読み上げる部分である。そのままでもよいし、キーパーの好きなように読み替えても構わない。

正気度ロールについて、1/1D4のように表記する。これは、ロールに成功した場合は1点、失敗した場合は1D4点の正気度ポイントを喪失することを表している。

シナリオの便宜上、各場面に番号を振っているが、時系列ではないので注意すること。

キーパー向け情報

シナリオの概要など、キーパーが事前に読む内容である。

シナリオに登場するアドゥムブラリ、捜し求めるものの詳細は、旧版のマレウス・モンストロルムのP.15、P.50を参照。新クトゥルフ神話 TRPG へのコンバートが必要である。

シナリオは大正8(1919)年5~8月、帝都にある『桜嶺女学院』を舞台としており、そこに通う女学

生の探索者が参加することを想定している。

シナリオの舞台や時期を変更する場合は、各キーパーで適宜、対応してほしい。

時期をずらす場合、本シナリオ単体で運用するにはそれほど問題は無いが、『天球賛歌事件』などの桜嶺女学院のNPCが登場するシナリオをその後などに想定している場合は調整が難しいので注意すること。

シナリオの概要

桜嶺女学院の礼拝堂に巣食うシスター七瀬こと月ヶ瀬七瀬は、『アドゥムブラリ』が作り出し、この次元へと送り込んだ『捜し求めるもの』である。彼女はその立場を利用して、女生徒たちを騙したり、丸め込んだりして催眠術を掛けて、『アドゥムブラリ』の元へと送り込んでいた。

探索者が桜嶺女学院へ入学して一月ほどが経過していた。授業が終わった後に正門をふらふらと出て行く、同じ学級の荒木佑を目撃する。彼女はそのまま車の前へよろめき出て、轢かれてしまう。

佑を助けようと近寄った探索者は、彼女が車の事故ではなく別の要因で奇怪な死を遂げるさまを目撃する。

翌日、記憶が薄れていることを不審に思いながら、佑のことを聞きこむと、やはり皆、一様に記憶が薄れており、関係者であると目される上級生の宮本庫子、同級生の高蔵寺瞬、小幡とらやシスター七瀬、教師の真田幸などもよく覚えていないと言う。

不審に思った探索者がさらに調査を進めると、関係者に親しかった島原四辻は、一ヶ月ほど前にどこかへ嫁いだと思われていた。しかし、死亡していたことが分かる。事情を確かめようと彼女の実家へと

赴くと、やはり彼女は病死しており、さらには佑と同じような死に様が目撃されていた。

四辻の部屋を調べるとそこには『アドゥムブラリ』と『捜し求めるもの』について言及した『イステの歌』が見つかり、彼女自身の研究内容も分かる。彼女は、『捜し求めるもの』の存在に気づいたために犠牲者に選ばれたのだ。

四辻と同じく、真田を頼った探索者達は再び関係者を洗うことで、シスター七瀬が『捜し求めるもの』ではないかとあたりを付ける。

そして、探索者は再び催眠術をかけようとするシスター七瀬に礼拝堂へと招かれ、そこで彼女と対峙する。

特殊な探索者

本シナリオでは女学校の下級生の探索者を作成することを想定している。

ルールブックに無い特殊な職業となるため、以下を採用する(キーパーの判断で採用しなくともよい)。

職業：女学生

いわゆる「はいからさん」。海老茶色の袴が大流行した時期には「海老茶式部」とも。

高等女学校、女子師範学校の生徒の事で、帝都では明治7(1874)年に神田に出来た女子師範学校(後の東京女子師範学校、現在のお茶の水女子大学)が有名で良家の子女が多く通っていた。

最初期、女子専門学校はほとんど帝都にしかなかった。実際問題、女子専門学校を作っていたのは在野の文化人、知識人であり、政府側には女子に高等教育を授けると虚栄心が助長されるだけとか、妊娠のもっとも盛んな二十一、二歳という結婚期を三年もおくらせ、民族の繁栄に悪い影響があるということが、まじめに主張されていた。

家政学科などのいわゆる女性的な学科ばかりではなく、通常の専門学校と変わらない専門教育をしているところも少なくなかったが、そういった科目が皆無という学校も無かった。

大正中期までは袴姿の女学生が多かったが、後期になると洋装や、制服(セーラー服など)を取り入れる学校も多くなっている。

職業技能：図書館、対人関係技能から2つ、研究もしくは個人的な専門として任意の1つの技能または運転(自転車)、任意の4つの技能

信用：30~50%

職業技能ポイント：[EDU×2+APP×2]

キーパーへ：その他の大正の探索者を作成するルールについては、帝都モノガタリの『大正探索者創造指南書』を参照してほしい。

さらなる若年の探索者

女学生の、しかも下級生の探索者の年齢は12~13歳となる(数え年だが)。

P.30の「年齢」に従えば15歳が通常の下限であるので、追加で以下の年齢による能力値の修正を行う(キーパーの判断でこの特殊なルールを適用しなくともよい)。

12~14歳：STRとSIZから合計10ポイントを減少させる。EDUから10ポイント減少させる。幸運を導き出す際は、3回ロールして、より大きなほうの値を使用する。

また、P.94の「年齢を重ねる」に以下の加齢による特殊なルールを追加する。

15歳になる：EDUの上達チェックを行う。STRとSIZに合計5ポイントを加える。

シナリオの背景情報

シナリオの背景になる情報である。直接関係ない部分もあるが、シナリオの理解のため一読して欲しい。

イステの歌

ロウンデズ『深淵の恐怖』によると、アドゥムブラリと、捜し求めるものについての記述があり、デイルカというオカルティストの家系が翻訳を続けているという。

ルールブックのP.231に名前だけ上がっている、その他の魔導書である。

原作の『深淵の恐怖』で、『ネクロノミコン』と並置されるような魔導書らしいのだが、アドゥムブラリの記述の関連しか言及されていないため、キー

パーはある程度自由に内容を創造してもよいだろう。

捜し求めるものの催眠術

『捜し求めるもの』の催眠術は、一見催眠術のように見えるが、実は犠牲者の精神をアドゥムブラリの居る次元へと送り込んでいるものである。

しかし、本シナリオで『捜し求めるもの』が使う精神攻撃は同様の効果を持ったものに加えて、記憶を曖昧にし、改ざんする効果も持つ。

さらにシナリオに登場する『捜し求めるもの』月ヶ瀬七瀬は<精神分析>、<ヒプノーシス>を高いレベルで修得しているために、これらとの合わせ技で、非科学的で超自然的な『捜し求めるもの』本来の精神攻撃を、まるで何か現実的な技能のように見せかけている。

捜し求めるものの見せる光景

『捜し求めるもの』は犠牲者をアドゥムブラリのいる次元に送り込むとき、催眠術のようなものによって、幻覚を見ているような状態に陥れる。

『捜し求めるもの』が見せる光景は、底の無い暗黒の深淵に掛かる細い橋と、その渡った先にある高台に花が咲いているものだ。

『捜し求めるもの』は、犠牲者たちに橋の先の高台にある花を取れば、望むものが手に入ると言い合せて、深淵にかかる細い橋のような場所を渡らせる。

最初の犠牲者となった島原四辻は、『捜し求めるもの』の甘言に乗らず引き返すことを選んだが、橋は引き返した場合は無限に続いていく(『捜し求めるもの』が催眠を解くまで、そこに橋はあり続ける)。影響力が弱まって現実世界にメモを残したところで四辻は力尽き、深淵へ落下してアドゥムブラリの餌食となった。

続く犠牲者となった荒木佑は花を得ることを選んだが、『捜し求めるもの』の誤った誘導によってふらふらと女学院外へ出て行き、車にはねられることで橋から落下、アドゥムブラリの犠牲となった。

催眠術の流行

明治初期の頃に心理学や医学の一環として催眠による治療が輸入されている(これを催眠術と翻訳したのは夏目漱石とされている)。

以降、快楽亭ブラックが催眠術興行を行うなどで明治中期に流行を見た。

明治36(1903)年に催眠術を使って女性にわいせつな行為を働く犯罪が行われ、同41年には催眠術による犯罪の処罰を含む「警察犯処罰令」が発令されてブームは下火となった。

しかし、催眠術という名前が使われなくなっただけで、明治末期からのオカルト、心霊ブームに乗って新興宗教やオカルティストたちが催眠術を行っていたようである。

桜嶺女学院

桜嶺女学院は架空の女子学校である。

神田区駿河台の辺りにあることを想定しており、現在でも辺りには大学も多く、またニコライ堂(正式名称は「日本ハリストス正教会東京復活大聖堂」)にも程近い場所にある(現在の千代田区駿河台、御茶ノ水駅の近く)。

桜嶺女学院は前身を桜嶺女子塾と言い、帝都にある華族の娘達に向けた私塾だった。これが明治32(1899)年の高等女学校令を受け、2年の準備期間をおいて明治35年に5年制の桜嶺女学院となる。

桜嶺女学院となることで、一般にも門戸を解放し平民の(それなりに金持ちの)生徒が増えている。

元々、私塾を開いた華族がカトリックに傾倒していた為、ミッション系の学校ではないものの、聖職者(平たく言うと尼さん)を招いてカトリックの教えを取り入れた女学校となっている。

しかし、実際には単に授業や学校行事に多少のカトリックのイベントが入っているだけで、実質的にはあまり普通の女学校と変わりはない。

初期の頃は教会の口出しもあったが、現在は実質的な運営には関わっておらず、創設した華族の一族と資金を出している実業家が運営している。

カトリックの聖職者を招いた、というだけ当時としてはかなり変わった印象を与えた女学校である。また、その為か、多くの変った経歴を持った教師が席

を置いていることで知られている。

登場人物(NPC)

シナリオの登場人物(NPC)を紹介する。キーパーはここに記載されているデータを好きなように変更しても構わないし、適宜 NPC を増減させて問題ない。

島原四辻、本当の最初の被害者

しまばら・よつじ、『お姉さま』の一人である。結婚が決まって女学院を中退し、今は幸せに暮らしていることになっている。

本当の最初の被害者で、『捜し求めるもの』の周囲に居る人間(つまり、女学院の関係者)は記憶が改ざんされ、死亡したことが忘れ去られている。

彼女は『イステの歌』を手に入れたことで『捜し求めるもの』に感付き、疑惑を持って調査をしたところで逆に催眠術によってアドゥムブラリの生贄とされている。

物静かで口数が少ないが、強固な意志の持ち主だった。

文学少女で海外文学などもたしなんでおり、真田と仲が良かった。海外からも文献を取り寄せており、『イステの歌』も名前から古い詩集か何かだと勘違いして購入している。

我慢強く、何事もやり遂げようとする性格で、『イステの歌』を真田の助けを借りつつ読んでいた。

事件の開始時点で死亡しているため、能力値等は省略する。

荒木佑、最初の被害者

あらか・たすく、最初の被害者と思われている。

島原四辻と宮本庫子の間に挟まろうとしていた。可愛いらしい妹タイプだが、ストーカー気味であり、四辻にはあまりよく思われていなかった。

四辻が、感情を表に出すタイプではなかったことと、うっとおしくはあったが避けるほどでは無く、庫子の方はそつなく対応していた。

庫子の歓心を買うために『捜し求めるもの』の甘

言に乗って催眠術にかかり、深淵にかかる橋に挑戦することになる。

だが、『捜し求めるもの』の罠によって無限遠の橋を渡ることになり滑落、アドゥムブラリの犠牲となる。

事件の開始時点で死亡しているため、能力値等は省略する。

宮本庫子、『お姉さま』

みやもと・くらこ、『お姉さま』の一人である。

身長がずぬけて高く、顔がいい。言動はイケメン。現代における宝塚の男役に似た、芝居がかった所作が好きだが、意思が弱いところがあり、押しに弱く荒木佑のこともはっきりと断り切れていなかった。

島原四辻が居なくなった後、新たな『恋人』はなく、『姉妹』も作る気は無かったが、小幡とらの美貌にほれ込み、ご執心である。ことあるごとにとらに絡もうとするが、まったく素っ気なく扱われている。

そんな中で佑につきまとわれており、三角関係のように解釈されて女学院でちょっとした噂になっている。

四辻のことは『捜し求めるもの』の催眠術によりどこかへ嫁いだと思いついでいる。一般の生徒には傷心のお姉さまのように見られているが、四辻が嫁に行ったことは素直に喜んでいて、四辻は婚家で幸せに暮らしていると曖昧に記憶しており、それを指摘すれば自身の記憶がはっきりしないことに気が付く。

シスター七瀬はよく話を聞いてくれるので、四辻とともに相談していたが、話を聞いてもらっているだけで具体的に何かアドバイスなどをしてもらっていたわけではない。

宮本庫子、イケメン女子

STR 60 CON 55 SIZ 80 DEX 60 INT 65
APP 80 POW 40 EDU 60 正気度 36 耐久力 14

DB : +1D4 ビルド : 1 MOV : 7

近接戦闘(格闘) 25(12/5)%, ダメージ 1D4+DB
回避 30%

技能 : 威圧 40%、運転(自転車) 25%、オカルト 35%、聞き耳 60%、芸術/製作(文学) 25%、自然

41%、信用 40%、心理学 30%、図書館 30%、魅惑 75%

※アドゥムブラリとの遭遇により正気度が低下している。

高蔵寺瞬、佑の親友

こうぞうじ・しゅん、荒木佑の親友で、暴走気味の佑を止める役になっていることもあって、妙な人気があると同時に、庫子からもある意味で頼りにされている状態である。

佑と異なり良識有る乙女であるため、小幡とらとも仲が良い(S文化に辟易しているといってもよい)。周りからは佑の恋人のように見られることもあるが、相棒のようなものである。

佑とは昔から家同士の付き合いもあり、幼馴染であると自らも認めている。佑の暴走気味な性格も承知しており、苦手な人も多いが彼女にとっては一番の友達である。

シスター七瀬と、真田にいろいろと相談しており、二人を上手く使い分けている。

瞬は女学生の探索者とは別のクラスである(3年生ぐらいまでは2クラス出来る人数である)。顔見知りであることにしてもよいし、小幡とらを介して会うのもよいし、同じ女学院の生徒であるので特に会うことに困難はない。

瞬は佑が死んだことは理解しているが、記憶が混乱している。前日に一緒に居たはずなのに、いつの間にか佑が一人でどこかへ行き、車にはねられた。

瞬は『捜し求めるもの』に中途半端に催眠されているのに加え、深淵にかかる橋を渡り、アドゥムブラリとの遭遇を経験したことで記憶が混乱している。このとき、佑に助けられて、瞬は助かり催眠から醒めている。

高蔵寺瞬、佑のブレイキ役

STR 65 CON 60 SIZ 55 DEX 70 INT 65
APP 75 POW 50 EDU 50 正気度 45 耐久力 12

DB : +0 ビルド : 0 MOV : 9

近接戦闘(格闘) 25(12/5)%、ダメージ 1D4+DB

回避 35%

技能 : 言いくるめ 50%、医学 31%、信用 30%、説得 70%、図書館 60%、ナビゲート 50%、目星 60%、歴史 45%

※アドゥムブラリとの遭遇により正気度が低下している。

月ヶ瀬七瀬、『捜し求めるもの』

つきがせ・ななせ、シスター七瀬と呼ばれている。礼拝堂を根城にしており、寮の舎監も兼ねている。

正式な聖職者や修道女ではなく、カトリックで奉仕の誓いを立て奉仕活動する方のシスターである。一部の気取った女生徒には『スール七瀬』と呼ばれている。

無能な働き者を装っており、未だに女学生気分が抜けない幼い雰囲気に加えて、その時分からのオカルト趣味を継続しているように見せかけている。

彼女は本物の聖職者ではなく、ただの奉仕者であるため、オカルト趣味についてもそれほど重大に捉えていない。

顔がよく、スタイルもよい。女学生時代に結婚、すぐに夫を亡くして若くして未亡人という背景を構築しており、シスターという立場もあり女生徒たちに信用されているが、小幡とらや、真田幸などからは蛇蝎の如く嫌われている。

彼女は桜嶺女学院の女子寮の舎監でもあるので、広く女生徒と付き合いがある。礼拝堂などで女生徒の相談に乗っているが、話を聞くだけでアドバイスらしいアドバイスはしない(大人に話を聞いてもらえて肯定してもらえる、だけで十分なものも多い)。

月ヶ瀬七瀬は<精神分析>を習得しているが、これを使って対象を落ち着かせるようなことはせず、逆方向への<精神分析>を行う。つまり、より深い狂気へと対象を導いて、催眠術に囚われやすくするのだ。

月ヶ瀬七瀬、人間の姿をしたアドゥムブラリの狩人

STR 70 CON 60 SIZ 65 DEX 70 INT 80
APP 85 POW 80 EDU 80 正気度 N/A 耐久力 13

DB : +1D4 ビルド : 1 MOV : 9

近接戦闘(格闘) 50(25/10)%、ダメージ 1D4+DB

回避 35%

技能 : 威圧 60%、言いくるめ 75%、オカルト 85%、考古学 31%、心理学 80%、信用 0%、精神分析 90%、人類学 71%、説得 70%、読唇術 80%、

博物学 80%、ヒプノーシス 90%、魅惑 80%、歴史 60%

正気度喪失：人間の姿をしている『捜し求めるもの』を見ても正気度を喪失しない

真田幸、新任の教師

さなだ・ゆき、イギリス帰りの歴戦の探索者である。帰国理由は半ばリタイアであり、静かに暮らすつもりで日本に戻ってきたはずだったが、その広範の(神話的な)知識を頼られることが多く、妙な先駆者扱いになりつつある。

恩師であり、学院の理事である桜小路那岐に誘われて女学院で英語を教えており、築地の自宅から通っている。

真田幸は女性ながらに英国に留学するなど、当時としてはかなりのエリートであった。数え年で 26 歳、この時代では行き遅れ、いわゆるオールドミスと見られている。

この年から桜嶺女学院に教師として雇われており、主に英語を教えている(彼女は広範な教養と知識を有しており、様々な授業を行うことが出来る)。

女学生のような袴姿に束髪を青いリボンで止めており、一部の女学生からは「古い」と評価されている。帰国の原因となった怪我の後遺症がまだ残っており、杖を付いて歩く姿を女学院内で見かける。

視力が落ちているため(怪我と夜間の行動、勉強が原因)、目つきが悪くなっている。一部の生徒はそれと知らないため、コワイ印象を持たれているが、とらや瞬などはそれと知っており、眼鏡を勧められている。

真田はシスター七瀬を胡散臭く思っているが、それは人には語らない。

真田幸、歴戦の探索者

STR 65 CON 60 SIZ 65 DEX 70(-15) INT 85
APP 80 POW 80 EDU 92 正気度 34 耐久力 13

DB : +1D4 ビルド : 1 MOV : 8

近接戦闘(格闘) 60(30/12)%、ダメージ 1D4+DB

仕込み杖：ダメージ 1D6+DB

射撃(拳銃) 60%

回避 27%

技能：言いくるめ 55%、応急手当 65%、オカルト

75%、隠密 75%、科学(化学) 55%、科学(生物学) 45%、科学(地質学) 55%、科学(天文学) 70%、科学(物理学) 55%、クトゥルフ神話 41%、考古学 65%、自然 90%、信用 80%、心理学 80%、人類学 65%、精神分析 80%、説得 70%、追跡 65%、てさばき 55%、図書館 80%、法律 45%、ほかの言語(英語) 80%、ほかの言語(ドイツ語) 40%、ほかの言語(ラテン語) 50%、目星 80%、歴史 80%

※真田の DEX は怪我の後遺症によって-15 されている。

オールドミス：明治時代の造語、流行語。適齢期を過ぎて未婚の女性、婚期を逃した女性を指す。Old Miss で、未婚の女性(Miss)と逃す(Miss)を掛けていると思われる。英語では OldMaid。対応する婚期を逃した男性はオールドオス。

小幡とら、目立ちすぎる新入生

おばた・とら、新入生で非常に目立つ。新入生らしい初々しい雰囲気の中にも、どこか頹廢的なものを漂わせている。

女学生探索者と小幡とらは同じクラスとする。

彼女は人目のない場所や、親しい相手には「だ、だね、だよ」と言った話し方をするが、人目がある場合はそれを抑え「です、ます」やお嬢様ことばで話す。

宮本庫子の関係で荒木佑から絡まれているが、とら自身は二人にあまり興味を持っていない。女生徒の間では三角関係のように言われているが、事実無根である。

荒木佑のことはうっとうしいが、その親友である高蔵寺瞬とは馬が合い仲良くしている。

入学後、僅かな期間でいろいろと煩わしい状態になりつつあり、すでに面倒くさくなっている。

今回の事件は完全にもらい事故でまったく本人には関係が無い。教師にも煩わしい人間が居るため、頼っているのは真田だけだが、頼りすぎると面倒なことになることは自覚しており、適度に距離を置いている。

彼女はシスター七瀬のことを胡散臭いと感じている。齢のわりに幼く、妙なオカルト趣味があるの

で、面倒な相手であると思っており、距離を置いている。

小幡とらは基本的に怠惰である。彼女は、「真の怠惰とは、規則正しく、最も少ない労力で、余計なことをする必要が無いようにする。そして、残念なことに私にはそういった規則正しく、が性分に合わないようだ」と語る。

小幡とら、頹廢的な雰囲気の新入生

STR 45 CON 60 SIZ 60 DEX 70 INT 75
APP 90 POW 50 EDU 55 正気度 50 耐久力 12
DB : +0 ビルド : 0 MOV : 8
近接戦闘(格闘) 25(12/5)%, ダメージ 1D4+DB
回避 35%
技能 : 言いくるめ 85%, 心理学 50%, 信用 70%,
説得 80%, 図書館 75%, 博物学 40%, 魅惑 75%

桜小路那岐、女学院の理事

さくらこうじ・なぎ、元は桜嶺女学院の教師であり、今は理事となっている。

華族風の名前だが、岩手の豪農の娘である(華族の婿養子を取って結婚しているが)。

品の良い老婆で、真田が現役の女学生時代は教頭職にあり、恩師の一人であった。

現在は理事の一人になっていて、特に用事があるとき以外は女学院には居ない。バザーなどのイベントには顔を出すぐらいである。

那岐はシナリオ中にはほとんど登場しないため、能力値等は省略する。

プレイの準備

プレイヤーが探索者を作成する、あるいは探索者のバックストーリーを編集する際に、以下のシナリオの冒頭を伝えておくとよいだろう。

— —

大正8年、帝都の桜嶺女学院の前で探索者達は奇妙な事故を目撃する。

事故の背後にある事件を察した探索者は、桜嶺女学院で探索を行う。

— —

また、シナリオに探索者を指定するハンドアウト

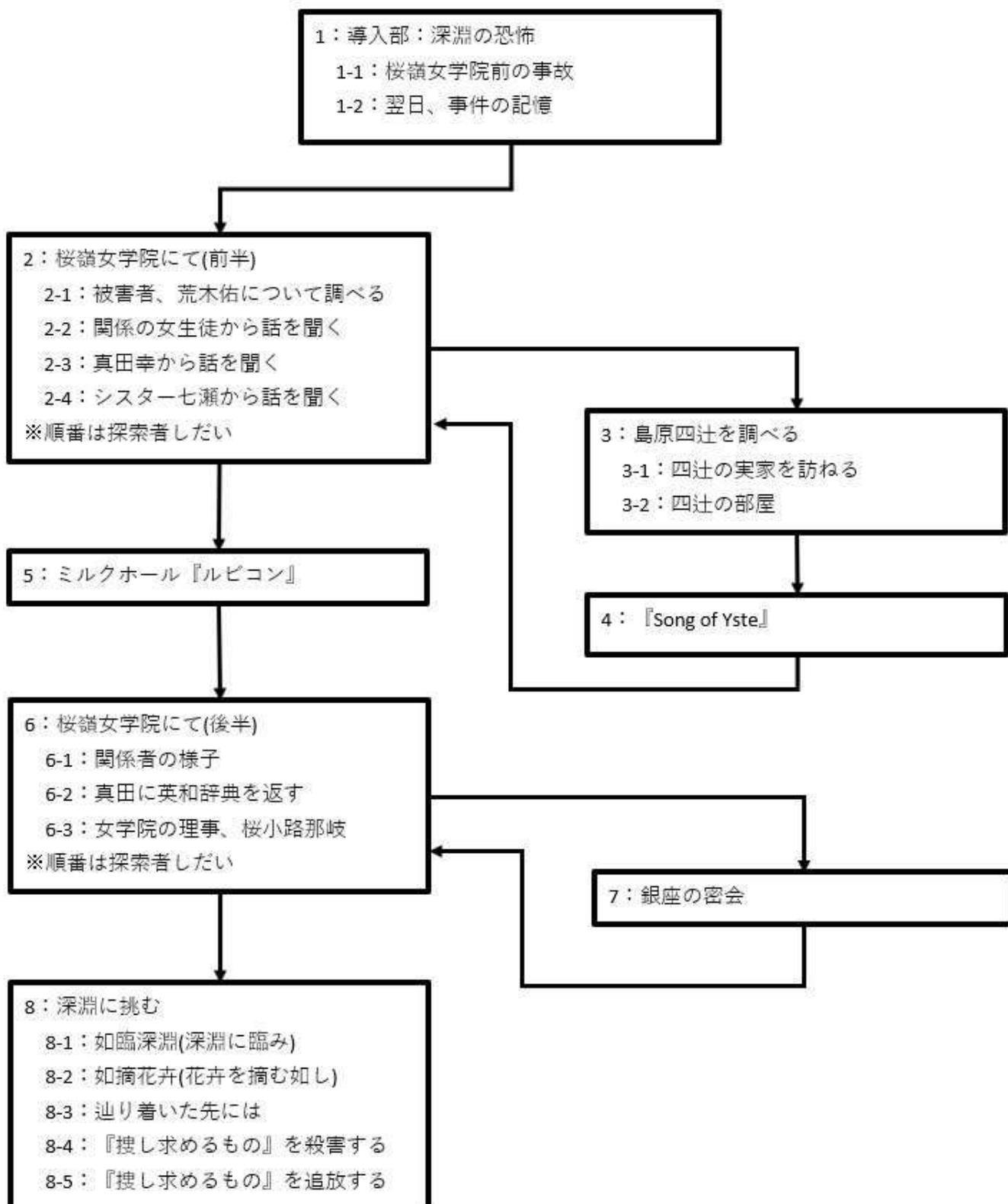
のようなものは存在しないが、女学生の探索者が必須で、しかも女学生探索者以外は探索に参加しにくい。

下級生となるため、年齢がルールブックで規定する探索者よりも低くなる。『特殊な探索者』を参照して作成すること(キーパーの判断で年齢の下限は無視してもよい)。

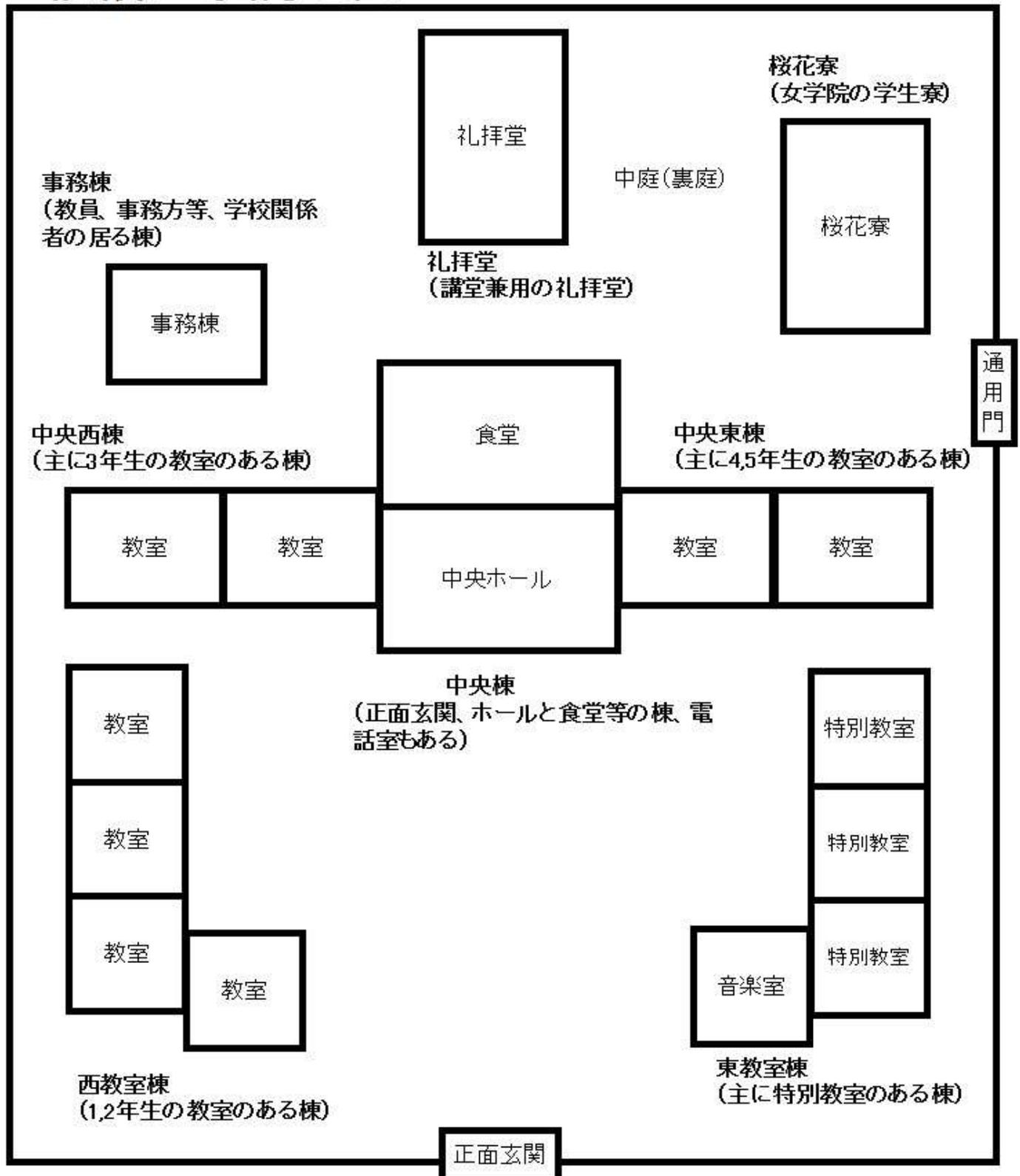
キーパーへ：ひらきなおって大正クトゥルフ・イン・ガールズスクール、探索者がすべて女学生でもどうだろうか(新クトゥルフ神話 TRPG 準拠ならば、年齢と EDU が直結しないのでやりやすいかもしれない)。

シナリオのシーケンス

『深淵に臨み、花卉を摘むが如し』シーケンス



桜嶺女学院地図



1：導入部：深淵の恐怖

この場面はシナリオへの導入となる。

探索者がいきなり事件に巻き込まれることになるため、キーパーは被害者の荒木佑と女学生の探索者が友人、級友であるなどして、顔見知りであるとして、無視できないことにするとよいだろう。

1-1：桜嶺女学院前の事故

女学生の探索者は女学院から下校時、それ以外の探索者は女学生の迎えに、あるいはたまたまそこに居合わせたことになる。

桜嶺女学院の正門を出たところで、女学院の前の道をふらふらと歩く女学生の後姿を目撃する。

その女学生をよく見た場合、それが同級生の荒木佑であることに気が付く。彼女がふらふらしているのは体調が悪いなどの様子ではなく、何故かバランスを必死にとって姿勢を保とうとしているように見える。

探索者達が見るともなしに見ていると、彼女はふらふらと車の行き交う道の真ん中へと歩いていく。

以下の描写を行う。

.....
甲高い金属をこすり合わせるような音に続いて、重いものがどこからか落ちるような音が大きく聞こえた。

探索者達の目の前で、ふらふらと歩いていた女学院の生徒が、そのまま車の前にさまよい出たのだ。

倒れた彼女の顔は恐怖に歪んでいる。閉じることのない目が、彼女を見る者の背後を凝視しているようだった。

車に轢かれたにもかかわらず血が一滴も流れていないが、見えている皮膚の上を不気味にきらめいて蠢く斑紋が覆っていた。

どこからか、百合の香りが甘く、重く漂った。
.....

探索者は彼女が車にはねられる際に「ああ、落ちる！」と、そしてこと切れる直前に、「お姉さま、花が」と呟くのを聞く。

探索者が佑の異様な死体を目撃した場合、0/1D6の正気度を喪失する。女学生の探索者は彼女と親し

いかどうかに関係なく、女学院の前で起こった女学生に対する事件から喪失する正気度が+1される。

1-2：翌日、事件の記憶

その日は事故の後の対応、事情聴取や現場検証、学校側への説明などに追われて、身動きが取れない。女学院に関係がない探索者でも事故の目撃者となれば、同じように拘束を受ける。

女学院の前の事故に関わった探索者は、アドゥムブラリの『捜し求めるもの』にその姿を目撃されて、催眠術のような精神攻撃を受けている。その日の終わりに POW ロールを行う。

ハード以上で成功した場合は何の影響も受けない。それ以外の場合は、前日の記憶に霧がかかったようになっており、女学院の前で事故に巻き込まれたことが曖昧にしか思い出せなくなっている。

これは一時的なもので、探索を始めて事件のことを考え始めれば霧が晴れ、普通に思い出せるようになる。

キーパーへ：強いて忘れよう、他の事をしようとするなど、つまり、事件の探索を放棄した場合は、曖昧な記憶は思い出せなくなる。その場合、シナリオが終了する。

2：桜嶺女学院にて(前半)

探索者が事件のことを考えながら桜嶺女学院へ登校すると、さぞかし昨日の事故でにぎやかなことになっているであろうという予想に反して、平常運転が再開されている。

女学生の探索者が自身の組の教室へ赴いても、まったく話題には上がっていない。これは生徒だけでなく教師も同様である。

箝口令でも敷かれたのかと疑っても、そういった様子はなく、すでに何カ月も経過したかのように忘れられている。

これは昨日に受けた『捜し求めるもの』の精神攻撃による影響だ。すでに事故のことは風化しかかっているのだ。

初夏の気持ちの良い日差しを受けた中庭の、木陰にしつらえられたベンチに宮本庫子と思しき人物が何か雑誌と思しきものを熱心に読んでいる。

ゆったりとひじ掛けに身を預け、袴姿にブーツを履いた長い脚を組んでいる。長い髪をまとめて動きやすくしたその活発そうな横顔、軽く目を伏せただけで頬に触れそうなほどに長い睫毛、涼しげな口元が絵になる女生徒だった。

庫子は熱心に雑誌を読んでいるように見えるが、実際は読書にそれほど興味が無いため、眠気を堪えるか目が滑りまくっている。彼女は人に見られることを意識して綺麗なポーズを取る方へ力を入れている。

探索者が声を掛けなくとも、近づいてくる気配に気が付いて庫子の方から声を掛けてくる。

「やあ、小さなお嬢さん。私に何か御用ですか？」(彼女の体格(SIZ)は大きい、それを除いても下級生に対してはだいたいこう言う。彼女にとって小さな、とは可愛いと同義である)

庫子に昨日の事件を訪ねた場合、「直接見ていないので分からないけれど、その前に佑様とは一緒にいたような気がする」、と言う。

彼女も他の女生徒と同じく何故かは分からないが、記憶があいまいになっていると語る。同じように、島原四辻についての記憶もそうだとする。

彼女が読んでいた雑誌に注意を向けた場合、その表紙から「スバル第六号」であることが分かる。

文学に関わる<芸術>を持っている場合は自動的に、そうでない場合は<知識>ロールに成功した場合、それが森鷗外や与謝野夫妻、石川啄木などが関わった文芸雑誌で第六号は明治 42(1909)年 6 月に発行されたものと気が付く。スバル派と呼ばれるロマン主義的な一派を生み出したり、作品が発禁になったりするなどで話題になったが、10 年も前ののである。

庫子に「スバル」について尋ねた場合、前述のとおり雑誌についての説明をした後、「というのは受け売りで、嫁入りの直前に四辻から押し付けられた……借りたものなんだ。森鷗外の『魔睡』を読め、とね」と語る。

その場で庫子を訪ねず、あとで「スバル」について調べた場合、特にロールの必要なく雑誌の情報を得ることが出来る。

「スバル」に掲載されている『魔睡』は、主人公の妻が、知り合いの医者から催眠術を掛けられてわいせつな行為を受けたのではないかと疑念を抱く。そして、それを主人公に告白したことで、その懊悩がつけられる短編である。

高蔵寺瞬

高蔵寺瞬は探索者とは異なるクラスである。その教室を訪ねた場合、怯えた様子彼女を見ることになる。

昨日の事件について尋ねた場合、「昨日、佑様と一緒に、ひどく恐ろしい何かを見た気がします。そして、それが何か思い出せないのがまた恐ろしいのです」と語る。

彼女も他の女生徒同様に記憶が曖昧になっており、事件の詳細を語るができない。特にロールの必要なく、記憶が曖昧であるのに非常な恐怖を感じているという不自然な状態であることが分かる。

彼女をあまり怖がらせたり混乱を助長したりした場合、『捜し求めるもの』に見せられた深淵の光景が記憶から甦り、悲鳴を上げながら気絶し、駆け付けた真田に睨まれることになる。

小幡とら

小幡とらは探索者と同じクラスになる。そして、とらのことを話題に上げていると彼女にしては珍しく話に乗って来る。

「うん、確かに庫子様から『妹にしたい』というようなことを言われた覚えはありますわ。ただ、『よく考えておきます』とお返事を差し上げたのを佑様にご存じになっていて、それ以来……」

よよと聞こえてきそうな名演であり、探索者もそれと分かる。

とらは巷で蔓延る S なる関係には全く興味はない。そのため、庫子や、佑のことは気にしていない。現在の女学院で目立つ存在である庫子や、それに追随している佑へ配慮してポーズを取っているに過ぎない。

とらは事件に直接関わっていた訳ではないが、前日の記憶が曖昧になっており、放課後に佑がどうしていたかは記憶が定かではないと言う。しかし、「彼女がいつもと同じように行動しているなら、おそらく庫子様の元へ行ったと思うよ。そうでなければシスター七瀬か」と言う。

S：エス。Sisterの頭文字をとったものと言われる。女性同士の恋愛感情、恋愛関係、あるいはほのかな憧れをも指して使われる。中でも特に年上と年下の姉妹のような関係のことを言うことがあるが、はっきりとした定義はない。

2-3：真田幸から話を聞く

真田は教師として忙しくしており、校舎内外を歩き来している姿をよく見かける。

真田から得られる情報は以下の通りである。探索者の話の持って行き方によって、何らかのコミュニケーション系のロールにボーナスダイスを与えて行う。

失敗した場合、真田はこの事件がきな臭いことを感じ取っており、警告を与えて余計な情報を教えないようにする。

- 昨日の事件について、直接的な情報を真田は持っていないが、礼拝堂に入っていく佑を見た覚えがある。ただ、それが昨日だったか、それ以前だったかは記憶が曖昧だと言う。
- 荒木佑は好奇心旺盛で遠慮がない。私や、シスター七瀬に対して、様々な話をしていた。私に対しては主に学問、特に英語や、文学の質問が主だったが、どうもシスター七瀬には宗教的、オカルト的なことを聞いていたらしい。
- 島原四辻は一ヶ月ほど前に結婚が決まって退学した、と記憶しているが、何故かぼんやりとしか覚えていない。四辻はいわゆる本の虫で、特に詩歌を好み、海外のものにまで手を出していたので、翻訳するのを手伝ったこともある。
- 高蔵寺瞬の様子がおかしいので気を付けて欲しい。昨日の佑の件はもちろんだが、それだけではないように思える。

真田は探索者が事件を探っていることに即座に気が付く。そして、「この件は深入りしないことをお勧めします。私の予測が正しければ、踏み入ってはならない領域、深淵を覗き込むことになります。

人助けや、真実の追求もよいですが、そこに伴う危険も忘れないように」と、警告を与える。

キーパーへ：真田は警告を与えるが、踏みとどまらせようとしている訳ではなく、自らの意志で選択せよ、と言っているだけだ(そして、踏みとどまるようなら探索者ではない)。

2-4：シスター七瀬から話を聞く

シスター七瀬と呼ばれる、月ヶ瀬七瀬はいつもの礼拝堂の定位置に居る。

探索者が礼拝堂に赴くと、いつものように定位置から出てきて、微笑みと共に出迎える。礼拝堂には彼女以外には居らず、そこを訪ねて来るのは基本的に彼女に用があると思われる。

礼拝堂の講壇には百合の花が飾られており、甘く、重い香りが礼拝堂を満たしている。この香りを嗅いだ探索者は自動的に荒木佑の事故現場での香りと同じであることに気が付く。

シスター七瀬は探索者に聞かれたことは何も考えていない様子で答えるため、特にロール等の必要はない(彼女が分からない、知らないことはストレートにそのように答える)。

- 昨日の事件のことを聞くと、七瀬はいつものように首を傾げて、礼拝堂にいつものように居たはずだが、何故か記憶が曖昧で何も覚えていないと言う。
- 荒木佑はよく相談を受けていた。ただ、相談と言うよりも雑談のようなもので、その中で悩みのようなものを聞いていた。そういえば昨日、佑にあった気がするが、記憶が曖昧ではっきりと昨日だとは言えない。
- 島原四辻と宮本庫子の二人は連れ立って礼拝堂にくることがあった。話す内容はやはり雑談の延長みたいなものだったが、文学に興味のあった四辻が靈感のような話をしたことがある。

シスター七瀬に講壇の花瓶に活けてある百合について尋ねた場合、「ああ、あれは……、あれは……。あらいやだ、あの百合はどうしたのかしら。誰かが贈ってくれたものだったかしら、それとも自分で買って来たものだったかしら」と、いつもの調子で百合がどこから出たのかは分からないと言う。

ただ、昨日から活けてあるものだと教えてくれる。

シスター七瀬は無邪気に相談があるのなら聞くと言う。しかし、彼女は文字通り『聞く』だけで有効なアドバイスをすることはない。

シスター七瀬に対して<心理学>を試みた場合、彼女が嘘をついていることは分からない。

彼女は自分が言うことに対して疑問を持たない。仮に事実と反したことであっても、彼女自身はそうだと信じているため、<心理学>によって嘘だと見抜くことは出来ない(幼い子供が自身の話すことがいつのまにか事実であると思いつくのと一緒だ)。

3：島原四辻を調べる

桜嶺女学院の関係者全員が、口を揃えて「四辻は嫁に行った」としか言わない。

わずか一カ月前の出来事なのにもかかわらず、みな一様に記憶が曖昧になっている。彼女とSの関係にあった宮本庫子まで同じ状態なのは異常であると言える。

女学生や女学院関係者に四辻の嫁ぎ先を訪ねても、軍人だ、華族だ、医者だ、実業家だ、大学教授だと様々な答えが返って来る。今どうしているかについても、夫について地方へ移った、大陸に渡った、帝都にある嫁ぎ先の家に乗まっているなど千差万別である。つまり、誰も答え合わせをしていない。異常を異常とも思っていないのだ。

このことに気が付いた探索者は、0/1の正気度を喪失する。

探索者が四辻の実家を調べた場合、女学院の事務関連や、庫子を訪ねれば教えてもらえる(探索者の学校や庫子に対する信用の問題で、特にロールは必要ない(<信用>とは関係ない))。

四辻の実家は小石川区の伝通院にほど近いところであり、桜嶺女学院から少々時間は掛かるが徒歩でも移動可能な距離である(もちろん、四辻は毎日車で送り迎えされていたが)。

3-1：四辻の実家を訪ねる

四辻の実家を訪ねるとどっしりとした日本建築の平屋住宅が出迎える。門構えも立派なもので、江戸期の屋敷を修繕して使っていることが窺える。

いかにも書生らしい門番を兼ねた若い男に来意を告げると、今度は使用人が出て来る。

用件はともかく、桜嶺女学院の関係者であることを告げると少々待たされた後、玄関脇の応接へと通される。

応接は和室だが、絨毯を敷いて応接セットが設置されており、洋室風になっている。しばらく待っていると、和服姿の疲れた様子の30代半ばの四辻の母と思われる女性が姿を見せる。

探索者の要件の切り出し方次第だが、桜嶺女学院の女生徒である、四辻と友人か近い関係であったことを明かせば、特にロールの必要はない。そうでない場合は、何らかのコミュニケーション系のロールが必要となる。

四辻のことを訪ねた場合、まず「娘は死にました」と簡潔に前置きをする。

四辻の母は、娘が女学院から車に乗らずにふらふらと歩いて帰ってきた後、衰弱して死んだという。もちろん、医者にも診せたが原因は不明であらゆる治療が役に立たず、うなされながらやせ細っていくことを眺めるだけだったと語る。

その他、探索者が訪ねた場合は以下のことを伝える

- 女学院には四辻が病死したことを連絡したが、それ以降は女学院の方からは連絡がない。
- 親しくしていた女生徒も居たはずだが、その後は訪ねる人も居なかった。特に、宮本庫子に関しては娘からも話は聞いていた。
- 娘の身体はまるで血が残っていないかのように干からびて、不気味にきらめいて蠢く斑紋が見えている皮膚の上を覆っていた。
- 女学院からの連絡もなかったうえ、娘の身体の

状態があまりに不気味であったため、早々に茶毘に付した。

キーパーへ：佑の場合は人目に付く場所であったため、アドゥムブラリは彼女から急速に生命力を吸収して殺害した。四辻は安全な場所に逃げ込んだためにゆっくりと鬨りながら殺害している。

探索者が四辻の母と友好的にコミュニケーションを取っている場合、去り際に、娘の部屋はまだそのままにしてあるので、形見分けという訳ではないけれど、何か思い出になるようなものがあれば、差し上げて構わないと言う(探索者の方から部屋を見せてくれ、というのも問題ない)。

3-2：四辻の部屋

四辻の部屋の半分、書架が掛けられている部分だけ洋室風に改造されているが、それ以外は純和風であり、彼女が書見台や文机で本を読むのを好んでいたのが分かる。

書架を除けばごく簡素であり、持ち物もあまり多くない。部屋へ案内した四辻の母は、「あちらに居りますので、あとでお声を掛けてください」と部屋に探索者を残して出て行く。

まず目立つのは文机で、その上には漆に蒔絵を散らした文箱が置かれている。その他にも衣桁や、行李箱に筆筒などもあるが、どれも鍵がかかるようなものではないため、探索者が家探しするのに障害は無い。

文机の引き出しからは彼女の私物と思しき物品は見つかるが、探索の手掛かりにはならない(四辻の人となりを知る手掛かりにはなる)。

文箱には細々とした品物から、愛用していたであろう万年筆と毛筆、和紙、便箋や封筒などが見つかる。底の方には当たり障りのない手紙が丁寧に収納されている。

文机の引き出し、文箱を調べれば文箱の中にあつた万年筆で書かれて郵送されていない手紙以外のものが、ほとんどないことに気が付く。

書架を調べた場合、こちらに敷かれた絨毯はすり

減っており、彼女がよく行き来していたことが察せられる。

書架には様々な本が詰まっているが、目を引くのは『Song of Yste』と題された古い洋書の隣に、寄木細工の小さな宝石箱のようなものが挟まっている。

<図書館>によって書架にある本を、<目星>によって書架に隠されたものを探すことが出来る。

ロールに失敗した場合、時間を掛けて丹念に調べれば同様の情報を得る事が出来るが、どちらかにしか適用できない。両方を行うと時間をかけ過ぎて日が暮れてしまうため、やんわりと四辻の母に追い出される。

プッシュロールに失敗すると何事か部屋にあるものを壊すなりしてしまい、やはり四辻の母に追い出される。

<図書館>で得られる情報は以下の通り。

- 四辻の読書の傾向が真田の証言を裏付けるように、詩歌や、幻想文学のジャンルが多い。
- 洋書や古い貴重な本まで混じっている。
- 『Song of Yste』と表題されている本は、この中で特に古く貴重だが、この本が詩歌の本ではなく、オカルトの書籍であることに気付く。
- 大正6(1917)年1月の「新小説」が『Song of Yste』の隣に置かれており、配置に違和感を覚える(すでに宮本庫子が「スバル」を読んでいたことを知っている場合、これに同じく催眠術を扱った谷崎潤一郎「魔術師」が掲載されていることに気が付く)。

四辻はこの書架を本の整理に使用する他に、自身の秘密を隠す場所になっている。<目星>で発見できる書架に隠されているものは以下の通り。

- 女学生の間で取り交わされるいわゆるSメールの類。
- 彼女の日記のような日々の記録。
- 『Song of Yste』の翻訳と研究の資料。

寄木細工の宝石箱

寄木細工の宝石箱を開けた場合は、箱の内側はビロード張りになっており、そこに何の宝石かは分からないが内部に慄然たる輝きを宿した多面体が収め

られている。

この多面体は<科学(地質学)>や<芸術(宝石などに
関わるもの)>によって、『その材質が分からない』
ことが分かる。

四辻への手紙

四辻にあてた庫子の熱烈な手紙である。詳細は省
略するが、読んでいて赤面するほどであり、間違い
なく他人に見せるようなものではない。

インクのかすれ具合や書かれた紙の状態などか
ら、それほど前ではないものから、数年前であろう
古いものまで、かなりの数を受け取っていることが
分かる(手紙には特に日付は書かれていないが、お
そらくもらった順に整理してある)。

その他の、おそらく他の下級生からであろうラブ
レターのようなSメールの類が同じく残されている
が、こちらの手紙は丁寧に保存されているものの、
十把一絡げに適当にまとめられている。

四辻の日記

日記としているが、まとまった日記のようなもの
ではなく、四辻が家の者にあまり見られたくないよ
うな内容の思いや、日常のメモのようなものを残し
ているものである。日付の入っているものもある
が、多くは書いた本人ならば分かるような内容とな
っている。

日常的なメモや読書の感想、庫子に対する愚痴と
惚気が多いが、その中でも気になるものは以下の通
りである。

内容が断片的であるため、読み上げるよりもハン
ドアウトとして提示するのがよいだろう。

『Song of Yste』、名前だけで判断。失敗。
歌とは関係ない。

真田先生に見てもらった。
三省堂の英和辞典を借りる。

隠れた知識。
Adumbrali, Seeker

S七瀬、佑、瞬、庫子と
催眠術が話題に上がる。

(一ヶ月ほど前の日付)
やはり、あの人は怪しい。
対抗手段を。

ひどく恐ろしいことになった。
あれが私を掴んで離さない。

落ちた。間に合わない。
庫子、助けて。

『Song of Yste』の研究資料

こちらは読み易くまとまっている。おそらく、書
いた内容を誰かに見せるつもりだったのではないかと
推測できる。

こちらもハンドアウトとして提示したほうがよ
い。

内容の表現が詩的である。それで『イステの歌』と
いうことか。

※以下、迷いながら、書いたと思われる文章(斜体
は四辻による翻訳)。

これらは『Adumbrali』にほかならず、この生ける
影は信じがたき力と悪意を備え、われらの知る時間
と空間の法則に縛られることなし。彼らが楽しみと
するところは、他の世界に住むものに恐るべき畏と
種々の幻影をしかけ、他の世界に住むものを彼らの
領域に引き入れることなり。

Adumbrali、固有名詞？

さらに恐るべきは、彼らがほかの世界や次元に送
りこむ『捜し求めるもの』であり、いかなる世界や
次元であれ、彼らはその住民の姿に似た、信じがた
き力を持つ探求者をつくりあげて送りこむ。

Seeker、『捜し求めるもの』としようか。

いかさま面妖なるは死体のありさまにて、一滴の
体液とてないにもかかわらず、死体にはいささかの
傷もなし。されどこのうえなく怖ろしきは、閉じる
ことなき目と不気味に輝く斑紋にして、目は彼方を
凝視しているかのごとくに見え、全身を覆う奇妙な

斑紋はうごめくことをやめず。

光を含んだ多面体？

退ける、退散させる……、生ける影に対する。

今度、真田先生に確認しよう。

探索者が四辻の部屋にあるものを持ちだしたいと頼んだ場合、よほど貴重なものでない限り、持ち出すのには拒否されない。彼女の部屋にある貴重なものと認識されているのは、文箱だけだ。万年筆もこの時代はかなり高価なものだが、島原の家では日用品の類である。『Song of Yste』に関しても四辻が購入した洋書である程度の認識であるため、借り出す場合でも否やは無い。

彼女の私信の類については、さすがに娘の友達と言えど持ち出すことは憚られるため、そちらは譲ることは出来ないという。

四辻の記録にある真田から借りたという三省堂の英和辞典も『Song of Yste』の近くで見つかる。これも事情を話せば持ち出すことが出来る。

万年筆：10世紀から似たようなものがあつたが、19世紀末には実用的な万年筆がイギリスで開発された。日本では明治17(1884)年に、丸善などが輸入、販売した。

明治41(1908)年に公文書へのインクの使用が解禁されたこともあり、普及が進み、国産化も進んだ。大正初期の第一次世界大戦に乗って製造、輸入が盛んになり国内メーカーが増加した。

基本的に高級品である。

4：『Song of Yste』

『Song of Yste』、『イステの歌』と題されるこの本は魔導書である。以下のデータを持つ(P.231の記載されている『イステの歌』はギリシア語版で、こちらは英語版である)。

この魔導書を読んだ場合、四辻が翻訳した内容が正しいことが確認できる。

『イステの歌(Song of Yste)』

英語、デイルカー一族、エリザベス朝時代。

デイルカというオカルティストの家系の著述と記録で、現代にまで伝えられている。一族は『イステの歌』を伝説的な形態から黎明期の三大文明の言語に翻訳し、後にギリシア語、ラテン語、アラビア語、エリザベス期の英語に翻訳した。

正気度喪失：1D6

<クトゥルフ神話>：+2%/+5%

神話レーティング：15

研究時間：11週間

呪文：記憶を曇らせる、犠牲者を魅了する、精神的従属、アドゥムブラリとの接触、石に魔力を付与する

石に魔力を付与する

コスト：10マジック・ポイント、1D4正気度ポイント

必要時間：1日

術者は透明度の高い宝石を用意し、それに向かってこの呪文をかけ、10マジック・ポイントと1D4の正気度ポイントを失う。この呪文によって魔力を付与された石は、「内部に慄然たる輝きを宿した多面体」となる。

この石は『アドゥムブラリ』が嫌がる性質の光を発している。彼らの潜む深淵の暗闇において大きく効果を発揮するが、それ以外の次元ではごく至近でのみ効果がある。

魔導書に関するルールの詳細はP.220を参照。キーパーは魔導書のルールに従って、所有者とともに「穢れた」バックストーリーのエントリーを検討しよう。

5：ミルクホール『ルビコン』

探索者が島原四辻の実家を訪ねた後にこの場面を行う。

その日の授業が全て終わると、小幡とらのほうから探索者に近寄って来る。

「やあ、今日は少し付き合ってくれたまえよ」

女学院の表に止まっている車に、別の場所で待機

するように告げた後、とらは探索者を連れて神田方面へ歩き出す。

神田にある元は甘味処だったと思しき店構えが、ミルクホール『ルビコン』の看板を出している。周りにはいかにも学生向けの喫茶店やカフェもあるが、とらは迷うことなくそこへと入る。

「まあ、君も適当に注文したまえ」

とらが妙な笑いを浮かべながら注文する。メニューを見ても、どこでも見られるミルクホールの軽食で、シベリアなどもある。しばらくして出て来たそれらは、見た目は普通だが想像を絶する奇妙な味がする(不味い訳ではない。飲み物は普通だ)。

「うん、ルビコンとは言ったものだ」

とらは、自らが頼んだものを難しい顔をしながら食べている。

「さて、本題だ。」

島原四辻先輩について、気になったから調べてみた。結論から言うと我々は何故か先輩が『嫁に行った』と記憶しているが、実際は病気で亡くなっていた。

そして、今、荒木佑君のことを我々は忘れかかっている。

「何が起きているのだろう。君の意見が聞きたい」

とらは探索者がこの件を調査していることをすでに知っている。よって搦め手や遠回しなことは言わず、聞かれる人間の居ない場所で直接訪ねたのだ。

探索者の返答次第だが、肯定的な答えを得た場合、とらは協力を申し出て、ともに事件の真相を究明しようと言う。

「理由はよく分からないけれど、やはり女学院にいると特に記憶が曖昧になりやすい。こうして、離れた場所でなら、事件の話をして頭にも頭に霞が掛かったようにはならない」

シベリア：カステラに餡子か羊羹を挟み込んだようなお菓子(洋菓子なのか、和菓子なのか不明)で、名前の由来も、何時から存在しているかも不明である。明治後期からすでに存在したとされているので、シベリア出兵のインパクトによって生まれた訳でもなさそうだ。

ちなみに中身の餡子か羊羹は溶かしたものを流し込んで作っているため、カステラにくっついている。

ミルクホール：明治初期、日本人の体質改善を目的として、「明治天皇も飲んでいる」と牛乳を飲むことを政府が推奨した。明治中期になると文字通り、牛乳を提供することを目的とした場としてミルクホールが生まれ、明治末期には全国津々浦々までに広がったと言われている。

ミルクホールと言うがミルクだけでなく他の飲み物や、ともに食する軽食の類や菓子にパンなども提供した。

新聞や雑誌なども置いて無料で提供したと言われており、カフェが少し敷居の高い文化人向けのイメージであったのに対して、学生なども利用していた。

ここで情報を整理して、今後の方針を確認するとよいだろう。

とらは至極単純に、事件のあった日、荒木佑の近くに居たのは宮本庫子、高蔵寺瞬、シスター七瀬の3人であるので、何らかの関係がある可能性が高いと語り、彼女らを洗ってみるのがよいのではないかと提案する。

6：桜嶺女学院にて(後半)

島原四辻の死を知った探索者は、荒木佑の事件と同様に、それに関わっていると思われる人物を洗うことになる。

6-1：関係者の様子

『ルビコン』でとらとの相談の後、再び関係者を洗うか、四辻の情報を共有してみるなどした場合である。

探索者がすでにシスター七瀬が『捜し求めるもの』であることに気付いている場合は、それを補強する情報を提供する。

宮本庫子

庫子は何気ないポーズをしているものの、どこか気の抜けた印象を与える。いつもなら中庭に一人で過ごすようなことは少ないが、例の「スバル」を片手に茫洋としている姿を見かけることになる(「ス

バル」はまったく読み進めていないが)。

前と同じく、探索者が近づけば庫子の方から気が付く。あえて<隠密>などで気配を消して近づいた場合は、彼女が前と同じく「スバル」の『魔睡』のページを開いて眺めているだけだと気が付く。

庫子に四辻の真実を告げた場合、彼女も混乱した記憶を呼び起こすことになる。

「ああ何だかもう遠い昔のこのように感じるけれど、彼女が亡くなったのはわずか一カ月前。

四辻のことがあれだけ好きだったのに、何故だろう」

独り言のように呟く彼女に、四辻の部屋で見つけた手紙や、催眠術の存在を示唆した場合、手にした「スバル」を眺めて思い出したように言う。

「そうだ、催眠術だ。四辻が、催眠術がどうか、そんな話をしていた。そして、四辻がそんなものは存在しない、というようなことを言い出して、では実際にやってみようか……」

「佑のときもだ。彼女と瞬が否定した催眠術を、誰かが……。佑は瞬を助けようとした。それで、それで……」

「思い出せない。ひどく恐ろしいものを見たはずなのに。それがきっと、四辻と佑の命を奪った……」

彼女は額を押さえながら、もう少しで思いだせるかもしれないと、しばらく一人にしてくれと言う。

高蔵寺瞬

瞬はいつもの落ち着いた様子はなく、そわそわしている様子を見せる。周囲の人々は、佑が居なくなったことが原因だろうと思っているが、何かに警戒している雰囲気を感じる。授業が終了すると可能な限り素早く女学院から離れようとする

瞬に四辻の真実を伝えた場合、彼女は口からほとばしる悲鳴を抑える。<精神分析>に成功した場合、彼女を落ち着かせることができる。

「四辻様！四辻様が催眠術を否定して、誰かがそれを実際に見せると言っていて、そして四辻様は……。

なぜかまた同じような会話が繰り返されて、今度は私と佑が催眠術を受けることになりました。そして、佑が私を助けてくれた。佑は四辻様と同じようなことになってしまった」

「四辻様はとても意志のお強いお方でしたから、きっとそれでご実家のほうへたどり着くまで耐え抜いたのですね。

でも、佑は女学院の前で……」

瞬は必死にそれだけ探索者に伝えようと、荒い呼吸で胸を押さえつつ、「ごめんなさい、これ以上は思い出せません」と断ってふらふらと帰っていく。

<精神分析>に失敗した場合、彼女の悲鳴は止まらずそのままぼったりと倒れる。異変を察した教師や周辺の生徒が群がってきて、彼女は運ばれていく(止める術はない)。

最後に彼女が「佑は深淵へと落ちたのです」と呟くのが聞こえる。

プッシュロールを試みて失敗した場合、彼女を気絶させたのは探索者の責任であると見なされ、その日は事務棟でみっちり説教を受けたうえ、実家へも不行跡の連絡をされてからやっと解放される。

シスター七瀬

シスター七瀬は全く変わりが無い。何事もなかったように普段通りに過ごしている姿を見かける。

あまりにも普通なのが逆に異様に思えるほどだ。彼女は日々起こることなどを一切気に掛けていないように見える。

シスター七瀬を観察していれば、礼拝堂の講壇に飾る花は彼女自身が活けていることに気が付く。

彼女に直接、四辻の話を振っても、いつものように「よそへ嫁いで、元気にやっている」と、とぼけた返事が返ってくる。講壇の花を自身が活けていることを指摘しても、「その日は」と認めるだけだ(あいかわらず記憶が改ざんされているふりをする)。

催眠術の話振ったときだけはまともな反応を見せて、それが実際に医療の現場で使われており効果が上がっていることや、今は心霊術の類などと言われているものが実は催眠術であるとか、実はそういったものが得意で催眠術を掛けて望むものを見せることができると語る。

探索者が子供のように得意げに語るシスター七瀬に否定的な反応を示した場合、彼女は「それなら、是非、体験して欲しい」と誘ってくる。

キーパーへ：『捜し求めるもの』、シスター七瀬の目的は獲物をアドゥムブラリの居る次元へと送り届けることである。このために、彼女は多少の常識外れの行動を許されるような性格を演じている。彼女は目的のために手段を選ばないだけで、悪意はない。桜嶺女学院という狩猟場を守り、機会を捉えて獲物を狩るだけなのだ。

探索者が四辻の部屋で見つけた光を内包する多面体を所持している場合、いつもは物理的な距離が近いシスター七瀬があまり近寄ってこないことに気が付く。それどころか、探索者が近づこうとすると一定の距離を取る。

彼女のことを女学院の事務などで調べた場合は、以下のことが分かる。

- 帝都でも有名なカトリック系の教会から奉仕活動として派遣されている。
- 女学院の理事である桜小路那岐の紹介である。
- 若い時分に結婚したが夫は戦争で亡くなっており、天涯孤独の身である。

『捜し求めるもの』の人間としての証拠は、公式の記録には存在していない。女学院の事務などに問い合わせた場合、偽造された情報や、催眠術によって刷り込まれた情報が得られるため、それほどおかしなことはない。

公的機関や、女学院外で情報を得ようとした場合(探索者の<信用>による伝手や、<法律>など)、『捜し求めるもの』の記録が存在しないことに気が付く。

これを女学院の関係者に相談しても、「そんなことはない、女学院には記録がある。何かの行き違いだろう」と否定される。

女学院に「正式な照会をせよ」、と指示した場合は、実行されずに『捜し求めるもの』の催眠によって「実行されて問題ない結果が得られた」ことになる。

6-2：真田に英和辞典を返す

四辻の実家で手に入れた英和辞典を真田に渡した場合、最初は不思議そうな顔をする。彼女の記憶から英和辞典を貸していたことは失われており、辞典

自体のことも忘れていたからだ。

そして真田は、記憶違いに気が付き、独り言のように呟く。

「私が、記憶違いをしている？」

いや、四辻さんは1か月前に興入れが決まって退学を……。違う、事故で？」

「そうだ、この三省堂の英和辞典は四辻さんに貸したの……。『イステの歌』…」

真田は探索者がまだ居ることに気が付くと、独り言を止めて、咳ばらいをする。そして、探索者が四辻の実家に行っていたことを察すると以下のように語る。

「私は四辻さんが『Song of Yste』、『イステの歌』と呼ばれる本を翻訳して、読もうとしていたことを知っています。

それが危険な知識である、ということをお伝えしたのですが、逆にさらに熱心に研究を始めました。その直後に、四辻さんは事故で亡くなったのです」

探索者が四辻の研究内容を真田に示した場合、『Song of Yste』で該当の箇所を確認しながら、「大意は問題ありません。元の『歌』と呼ばれるような文章と、彼女自身の趣味で少々詩的ではありますが」と言う。

四辻が翻訳中だったと思しき箇所について、真田は次のように語る。

「彼女が、『光を含んだ多面体?』としているのもおおむね正しいでしょう。光を内包する多面体とも訳しましょう。

「生ける影を退ける、すなわちこの本の中で『Adumbrali』と呼ばれる存在が、その『光を内包する多面体』を嫌がるのか、遠ざけるか、あるいは打撃を与えるのかは分かりません」

四辻の部屋から『光を内包する多面体』を持ちだして真田に見せた場合は、「いった通り、『イステの歌』に書かれていることが正しいのならば、生ける影『Adumbrali』を退けるものを彼女が用意していたのでしょうか」と言い、「貴方が持っていた方がよいでしょう」と多面体を返す。

去り際に探索者に対して、真田は以下の様な警告を与える。

「『聖人ジャーナルカーン』は語る。『捜し求めるも

の』の一人がナイアグホグアの神官七人をたぶらかし、催眠の技くらべに引き込みたるあり』、『イステの歌』の一説です。

警戒を怠らないよう」

6-3：女学院の理事、桜小路那岐

女学院の授業後、真田が廊下で品の良い老女と親しげに話し込んでいるのを見かける。

女学院のイベントでよく見かける老女で、それが理事の一人である桜小路那岐だと分かる。

探索者が挨拶(お嬢さまの挨拶はいつでもどこでも「ごきげんよう」だ)をして通り過ぎようとする、遠くを礼拝堂に向かって歩くシスター七瀬の方を見ながら、「あら？誰だったかしらね」と言う。

真田からあれはシスター七瀬だと教えられると、「いやだわ、すっかり記憶力も弱くなっているのかしら。あれは月ヶ瀬七瀬さんだったわね」と苦笑する。

桜小路那岐は女学院の関係者を全て記憶しており、常に女学院に居ないこともあってシーカーの催眠術の影響が弱い。このため、本来は記録にないはずの『捜し求めるもの』を見ておかしいことに気が付くが、女学院に近づくとその影響を強く受けるために、記憶にあることになってしまっている。

キーパーへ：真田は独自に探索を行っており、得られた結果の確認のため、桜小路那岐に『捜し求めるもの』の面通ししている。真田自身は女学院の関係者で、彼女の記憶に無いものがあるはずがないことを知っている。

7：銀座の密会

探索者がシスター七瀬の身元が偽造であるか、『捜し求めるもの』であることに気が付いたら、この場面を行う。

探索の進行度合いや、キーパーの判断で蛇足のよう感じた場合は行う必要はない。探索者達が踏みとどまっている場合など、最後の押しとして行うと良いだろう。

気が付くと女学生の探索者の持ち物のどこかに、

紙片が挟まっていることに気が付く。

素気の無い紙片には「本日、銀座、資生堂ソーダファウンテン」とだけ書かれている。

探索者が資生堂ソーダファウンテンに来ても誰かが待っている気配はないが、『何故かたまたま』真田が通りかかる。

学外に誘ったのはひとえに女学院内では事件に纏わる記憶が曖昧になることに加えて、関係者(おそらくシスター七瀬が)に犯人が居ると気づいているためである。

資生堂ソーダファウンテンに入って注文を通したのち、真田は島原四辻についてやはり死亡しており、事故として処理されていること、その行動の前後が荒木佑の場合と同じく、記憶が曖昧になっていることを告げる。

「我々は、ひどくよくない状況に直面していると聞いてよいでしょう」

ここでは真田自身の調査結果、シスター七瀬が『捜し求めるもの』であることを探索者と確認する。

探索者が事態を理解できていない場合は、彼女の解釈として事件を語らせればよいだろう。

資生堂ソーダファウンテン：銀座の資生堂薬局に明治 35(1902)年に開設され、はじめはソーダファウンテンの名前の通り、ソーダ水やアイスクリーム、それを組み合わせたアイスクリームソーダを提供していたが、そのうちに軽食なども提供するようになった。

その後、昭和 3(1928)年に資生堂アイスクリームパーラーに、戦後の昭和 29 年に資生堂パーラーになる。

8：深淵に挑む

『捜し求めるもの』がシスター七瀬であると探索者達が判断した場合、この場面へと進む。

あるいは、キーパーが時間切れであると判断した場合でも、強制的に進んでよい。

『捜し求めるもの』シスター七瀬は探索者のその積極性を逆に利用して、罠にかけようとする。探索

者をアドゥムブラリの餌食にするのは、彼女の謎が暴かれようとしていることを防ぐことでも有効だと判断したのだ。

直接、探索者へ催眠術を行うことを告げて礼拝堂に招いてもよいが、それではあまりにも警戒されるため、宮本庫子、高蔵寺瞬、小幡とらに声をかけてそれが探索者に伝わるようにするとよいだろう。

基本的にこの場に真田は登場しないが、探索者が危機に陥った場合に助っ人として登場させるのもよいだろう。

8-1：如臨深淵(深淵に臨み)

探索者が礼拝堂に集まる関係者を見かけるか、あるいは参加しようとする小幡とらなどに声を掛けられて、一緒に赴くことになる。

シスター七瀬が再び催眠術を行おうと提案してきたのだ。

庫子、瞬、とらの3人は『捜し求めるもの』の催眠術の影響を強く受けており、シスター七瀬を強く疑うことができないうえに、彼女の精神に影響を及ぼす技術(<心理学>や、<精神分析>、<ヒプノーシス>)によって拒否できない状態となっている。

礼拝堂の講壇には百合が活けられており、甘く重い香りが辺りに漂っている。

シスター七瀬はいつもの微笑みを浮かべながら、このところよく催眠術の話題を皆が上げてきており、懐疑的なのも分かるが、実際に効果のあるものなのだ、と、前と同じく催眠術が医療の場面にも応用されていると滔々と語る。

彼女は催眠術をかける対象は誰がよいか、探索者に聞いてくる。

ここで探索者自身が手を挙げればよいが、特に誰も推薦しない場合は、もっとも懐疑的であると思われる探索者をシスター七瀬が指名する。このとき、催眠を受けるのは一人でも複数人でもよい。

これを拒否した場合は、かわりに庫子が「では自分が」と手を挙げる。

シスター七瀬が催眠術を始めたところで、以下の描写を行う。

よくある催眠術のように、鏡や光といった催眠状態

を引き起こす機械的な手段を、シスター七瀬は取らなかった。

「これは、純粹な意志の問題なのです」

シスター七瀬が厳かに宣言し、そして探索者を見た。手を振ったり、命令したり、そんなこともしなかった。

探索者が催眠術に抵抗する場合は、シスター七瀬と対抗 POW ロール(ルールブック P.237 を参照)を行う。失敗したか、抵抗しない場合は催眠術にかかる(キーパーの判断によって、この対抗 POW ロールを省略して自動的に催眠術にかかったとしてもよい)。

催眠術にかかった探索者に、以下の描写を行う。

まるで電撃を受けたかのように、探索者は身をこわばらせ、虚ろな目を講壇の百合へと向けた。

探索者は恐ろしい深淵にかかる橋のようなところにいる。深淵は見渡す限りに広がっており、底は見えずただ暗黒が広がっている。

背後には青みがかった霧に隠されるところまで橋が続いており、前方は美しい高原のような場所に通じているようだった。

深淵をのぞいているだけでバランスを失いかねないため、どちらかへ進まなければならないが、妙に身体が重かった。

そして、囁くようなシスター七瀬の声が聞こえてくる(現実の世界では、ごく近い距離で彼女が囁きかけているのが見える)。

「花をお取りなさい。貴方の望むものが手に入れられる」

8-2：如摘花卉(花卉を摘む如し)

深淵にかかる橋に降り立った探索者は、高台に向かって進むか、青い霧に向かって戻るかを決める必要がある。このとき、背後の青い霧は向こう側が見えないことを伝えること。

この時点では焦ったり、急いだりしない限りはよほど運が悪くない限りは落ちたりはしない、と探索

者に告げてよい。ただし、探索者が高所恐怖症などの場合、この限りではない。

探索者が進む方向を決め、前進を始めたところで以下の描写を行う。

— —

深淵の底に何かがいるようだった。漆黒の塊が集まっている巨大なものだったが、それが生きることが分かる。

生ける影だ。一目見ただけでそう思った。

そいつの中央の塊から信じられないほど長い触覚が伸びているのが見える。そいつは前後、水平に動くだけで垂直には動けないようだった。

そいつは同一の平面にいるわけではなかった。その動きは水平方向に限られていたが、そいつは探索者の横にも斜めにも居たのだ。

そいつが探索者に迫ってきた。

— —

生ける影、アドゥムブラリを目撃した探索者は、0/1D6 の正気度を喪失する。

続けて、以下の描写を行う。

— —

蠢く影が探索者に触れることは無かったが、探索者を感じ取っているようだった。

盲目的にそうしているには違いなく、二次元の生物であるかのようだ。

こちらに向かって伸びて来る触手は真っ黒だった。

探索者は直感する。これは単なる催眠術ではなく、超次元の旅なのだ。いまだに礼拝堂の床の上に立っているというのは想像に過ぎない。おそらく、シスター七瀬の影響だろう。

名状しがたいこの次元がこの生ける影の棲み処なのだ。深淵と立っている橋はシスター七瀬が作り出した幻影だ。

— —

アドゥムブラリが探索者に迫って来る。それから逃れるために、チェイスが始まる(ルールブックの P.128 を参照)。

ここで戦闘を行ってもよいが、探索者に相手は二次元の影で物理的な攻撃手段は見ると効果が無さそうだと伝えておこう。また、足場が悪いこともあり、まともな戦闘が難しいため戦闘的な行動(<回避>を含む)に対してペナルティ・ダイスが与えら

れると宣言してもよい。

また、この場でプッシュロールでの失敗は言うまでもなく、深淵へ落下することになる。

チェイスでは橋の先に見える高原に、探索者が到達するとアドゥムブラリは追跡を諦める。逆方向に逃げている場合、外部(現実世界)からの干渉が無い限りこのチェイスは終わることが無い。

チェイスの長さはキーパーの判断次第だが、追われる側(探索者)の開始位置から 5~10 の点を置くとよいだろう。

チェイスには以下の様なハザード(障害物)、バリアー(障壁)をキーパーの判断で配置する。

- ハザード：橋が細くなっている(DEX ロール)。
- ハザード：橋に段差がある(<登攀>、または STR ロール)
- バリアー：橋が一旦途切れている(<跳躍>)
- バリアー：橋が岩などの障害物で塞がれている(STR、<登攀>、または 5 ポイントの耐久力を持つ)。
- バリアー：探索者を探す(POW ロール、アドゥムブラリのみ)。

これらのハザード、バリアーはアドゥムブラリの動きを阻害しないため、アドゥムブラリの方は影響を受けずに移動アクションを行える。ただし、探索者を追跡するために、POW ロールに失敗した場合は一時的に探索者を見失って動きを止める。

光を内包する多面体を所持している探索者が、アドゥムブラリの攻撃に対して<回避>を試みる場合、ペナルティ・ダイスを無視するか、攻撃に対して<近接攻撃>で防ぐことが可能にしてもよい。

アドゥムブラリ、異次元の生ける影

STR N/A CON 60 SIZ 130 DEX 50 INT 70

POW 70 耐久力 19 MP 14

DB : N/A ビルド : 1 MOV : 8

攻撃

1 ラウンドの攻撃回数 : 1

攻撃方法 :

繊維状突起(mnvr) 30(15/6)%, ダメージ 5D6 の STR と 5D6 の CON を吸収

装甲 : なし。ただし、現実世界の武器を無効化する

る。魔術、魔力を付与された武器、及び POW、INT に影響を与える武器のみダメージを与える。

呪文：記憶を曇らせる、犠牲者を魅了する、精神的従属

正気度喪失：アドゥムブラリを見て失う正気度ポイントは 0/1D6

キーパーへ：探索者側があっさりアドゥムブラリを引き離してしまうような事態は望ましくないが、失敗が致命的なチェイスとなるため、探索者の能力値、技能を事前に見て検討を慎重に行おう。

探索者が落下してしまったり、アドゥムブラリに追い付かれて攻撃を受けたりした場合、現実世界に残っている人々はそれによって傷つく様子を目撃する。

探索者が落下した場合は、毎ラウンド自動的にアドゥムブラリの攻撃が命中している状態になる。即死しているわけではないので、現実世界からの干渉によって催眠から目覚めることが出来れば、助かる可能性がある。

探索者が外部からの干渉によって元の世界に戻るには、催眠術を行っているシスター七瀬に対して攻撃するなどして止めればよい。この場合は、無理矢理現実に戻されたショックによって、探索者は一時的に気絶する。

キーパーへ：特に探索者が一人だけである場合は、庫子や真田が助けに入った、などとして現実世界に戻したことにしてもよいだろう。

8-3：辿り着いた先には

探索者が高台に辿り着いて、そこに咲く花を摘むと現実世界に戻って来ることが出来る。

探索者は礼拝堂の講壇の前に立っており、その手には活けられていた百合の花が握られている。

シスター七瀬の顔からは表情が消えている。いつもの軽く微笑んだ無表情ではなく、今までに見たことが無い能面のような、おそらく人ではない顔である。

「そんなことがあり得るのだろうか」

いつもと全く異なる声と口調で、シスター七瀬はよろよろと探索者へと近づく。

キーパーの判断により、以下の描写を行いシスター七瀬が消えることにするか、次章のように戦闘を行って後腐れなく『捜し求めるもの』を消し去るかを決める。

まるで電撃を受けたかのように、シスター七瀬は身をこわばらせ、相変わらず能面のような顔を探索者の持つ百合へと向けた。

彼女の顔に驚愕が浮かぶ。そして、バランスを取るように一瞬だけ身をよじった後、ふといつもの微笑みが顔をよぎると、そのままぱたりと倒れこんだ。

彼女だったものは、今や平面の黒い影だった。おかしい話だが、影が修道女の服を着ている、そんな風に見える。だが、そう思った次の瞬間、影は消え去り、服だけが残っていた。

任務に失敗した『捜し求めるもの』を、アドゥムブラリが回収したのだ。シスター七瀬だったものは本体であるアドゥムブラリに吸収され、新たな『捜し求めるもの』を作り出すために再利用される。

ただし、次の『捜し求めるもの』を作り出すためには時間が必要になる。

8-4：『捜し求めるもの』を殺害する

探索者によっては、『捜し求めるもの』シスター七瀬を直接殺害しようとする可能性がある(直接的な判断だが、ある意味では正しい)。

シスター七瀬は基本的に無警戒である。<心理学>に長けているうえ、『捜し求めるもの』として人間の精神に影響を与えることができるが、敵対的な人間が殺意を持ち、直接的な暴力に出るまでには思い及ばないし、相手の心が読めるわけでも無い。

『捜し求めるもの』シスター七瀬の能力は登場人物にある通りで、基本的に人間と大きく変わりはない。

探索者が光を内包する多面体を所持している場合、それをシスター七瀬に近づけると動きが鈍るうえに、そちらを避けるのを優先するために常に数値的不利(ルールブック P.104 を参照)を受けている状態になる。

彼女が光を内包する多面体に照らされた場合、以下の描写を行う。

多面体の光に照らされたシスター七瀬は、十字架を突き付けられた吸血鬼のように、それを避けようと身体をよじる。

その光によって浮き出した影には、彼女が身に付けているものしか映っていなかった。

シスター七瀬に影が無いことに気が付いた探索者は、0/1の正気度を喪失する。

人間の姿のシスター七瀬の殺害に成功した場合、以下の描写を行う。

倒れたシスター七瀬はしばらく断末魔の名残のように痙攣していたが、完全に動きを止めた。流れ出る血は人間と同じように見えるが、その量は異常に少ない。

探索者の見ている前で、彼女の身体が黒く変色を始めた。まるで黒い影のようだと思い始めたところで、彼女の身体が平面のようになりつつあることに気が付く。

シスター七瀬の身体は床に張り付く影のようになり、次第に縮んでいった。

最後に残ったのは、彼女が着ていた黒い修道服だけだった。

『捜し求めるもの』が、アドゥムブラリとしての本来の姿を取り戻しつつ、消失するさまを目撃した場合、0/1D6の正気度を喪失する(この正気度の喪失は、『捜し求めるもの』が人間と同質のものに化けていたことによるものであるため、アドゥムブラリを目撃していることによる正気度喪失の軽減はない)。

シスター七瀬は元々社会的な基盤がぜい弱であるため、殺害後、行方不明扱いとなるがどこへ照会をかけてもそのような人物の記録がないことが分かる。

彼女の催眠術が解けることによって、そもそもそのような人物が居たかすら疑問が持たれるほどに、確実な記録が残っていない。

女学院側として不可解な事件として処理され、急速に関係者からは忘れ去られる。

キーパーへ：面倒になったからしばこう、だけは避けたいが、暴力は全てを解決する。

本来、催眠術は戦闘中に使用できるようなものではないが、キーパーの判断でシスター七瀬の催眠術が戦闘中でも効果を発揮し、探索者を深淵へと送り込むような展開にしてもよいだろう。

8-5：『捜し求めるもの』を追放する

探索者によっては、『捜し求めるもの』シスター七瀬が社会的に脆弱であるという弱点を突こうとする可能性がある(むしろ、常識的な判断とも言えるが)。

探索者の手段によるが、これまでの探索によって月ヶ瀬七瀬の身元、経歴が偽造であること(正確には偽造ではなく、詐称、あるいは誤認させている)、紹介されたというカトリック系の教会にも所属していないことなどが分かっているため、そこを突くと同時に、**学外からの圧力をかける**ことでシスター七瀬を女学院から追放できる。

探索者の証拠集めと話の持って行き方次第にはなるが、<法律>や<説得>、あるいは<信用>などを活用するとよいだろう。

キーパーへ：この手段は、桜嶺女学院からシスター七瀬を追放することで、被害が別の場所へ移るだけになる、ということを探索者にも伝えること。

探索者はスーパーヒーローではない。この手段が悪いとは言わないが、根本解決には遠く、何かのきっかけで『捜し求めるもの』が再び探索者の前に立つ可能性があることは認識させよう。

追放されたシスター七瀬はしばらく帝都で鳴りを潜めてほとぼりが冷めたところで活動を再開するか、名古屋、大阪などの別の都市圏へ移って同じことを繰り返す。

9：結末

結末は探索者の行動によって異なる。

次にあげるものが主なものとなるが、シナリオの経過や探索者の傾向、キーパーの好みなどに合わせて結末を演出しよう。

9-1：消えたシスター

『捜し求めるもの』シスター七瀬の催眠を打ち破り、彼女の浄化に成功した場合、女学院を覆っていた催眠、精神攻撃は解ける。

妙にオカルトに寛容的だったり、先日のことがよく思い出せなかったりすることはなくなり、本来の節度を保ったリベラルな雰囲気に戻ってくる。

探索者の手によって、女学院に巣食う邪悪な狩人は駆逐されたのだ。

シスター七瀬のことを覚えている人間は居なくなる。もともと、礼拝堂にシスターなど居なかったのでもそれに問題は無いが、桜花寮に舎監が居ないのはおかしいため、大急ぎで真田がその役に抜擢される。

9-2：狩りは終わらない

『捜し求めるもの』を桜嶺女学院から追放した場合、同じように女学院を覆っていた不穏な雰囲気は去る。

多くの学校の関係者は、しばらく経つとシスター七瀬の存在自体を忘れてしまう。

しかし、シスター七瀬が去っただけで、どこか別の場所で相変わらず人間を深淵へ送る狩りを続けているのだ、ということを探索者は忘れられない。

9-3：深淵はより暗く

探索者が探索を放棄するか、キーパーが時間切れであると判断した場合、事件は解決せず探索者の記憶から薄れていく。

以降、桜嶺女学院では気が付くと記憶から消えている女生徒が多くなるが、それ自体に気が付くこともなく、何故か不自然な空席ができた教室を眺めることになる。

9-4：それぞれのその後

シナリオの結末によっては異なるが、登場人物のその後は以下のようなことになる(事件が無事に解決した場合を想定している)。

宮本庫子

事件の後、四辻の実家を訪ねて、彼女の形見をもらってきたと探索者に報告する。

庫子は努めて以前のような明るい言動を取り戻そうとするが、時折、淋しそうに笑う彼女を見ることになる。が、事情がよく分かっていない、特に下級生からはそれがまた良いなどという話を聞くことになる。

以降、庫子は女学院に留まり、下級生を沸かせ続けるものの新たな恋人などは作らず、卒業していく。

高蔵寺瞬

瞬は事件が解決した後も女学院にはあまり出てこなくなる。事件がトラウマとなり、女学院自体が恐怖の対象となっているのだ。

探索者が気にかけるのならば、同じく小幡とらも彼女を気にかけて女学院に復帰できるように面倒を見る。

数カ月経てば、すっかり元通り、とは言わないもののどこか影のある下級生として上級生の間で噂になるが、これは庫子があまり騒がないようにと止めてくれる。

瞬は3年生に上がる前に荒木の家の親戚と結婚が決まり、退学していく。

もしも探索者が気かけなかった場合、彼女は症状が悪化して女学院を退学して、転地療養として信州の方へ移っていく。

小幡とら

事件の後も表面上、とらに変わりはない。

生来の怠惰さに磨きがかかり、中庭の辺りで煩わしいことを回避する姿をよく見るようになる。

半年も過ぎる頃になると、彼女が高嶺の花なのではなく、咲かないつぼみであることが上級生には知れ渡って、事態は沈静化する。

そういったことも知ってか知らずか、彼女は日々を飄々と過ごしている。

真田幸

事件後、真田は積極的にこの事件へ関わらなかったことを後悔する。女学院で働くことはイギリスからの帰国後、静養を兼ねたものであったが、少なくとも自分自身の手の届く範囲の人々は守らなければならないと決意する。

以降、真田は女学生風の袴姿は止めて、ぱりっとした洋装に、高い位置にまとめた髪を例の青いリボンで縛って、眼鏡をかけた姿を見ることになる。

眼鏡によって目つきが悪いことは緩和されたが、その突き通すような鋭い眼光は衰えないどころかより増しているために、女学生たちからはやはりちょっとコワイという評価は変わらない。

10：正気度の報酬

探索者によって結末は異なるが、シナリオの結末によって得られる正気度の報酬は以下の通りとなる。

『捜し求めるもの』の正体を暴き、駆逐した場合、1D10 点の正気度ポイントを獲得する。

『捜し求めるもの』を殺害した場合、1D8 点の正気度ポイントを獲得する。

『捜し求めるもの』を桜嶺女学院から追放した場合、1D4 点の正気度ポイントを獲得する。

探索者が探索を放棄した場合、桜嶺女学院は未だに『捜し求めるもの』の狩猟場となるため、1D6 点の正気度を喪失し、いつ餌食になってもおかしくないことになる。

『イステの歌』を読んでいる場合、追加で 1 点の正気度ポイントを獲得する。

島原四辻の記憶を NPC 達に思い出させている場合、追加で 1 点の正気度を獲得する。

11：シナリオを変更する指針

このシナリオは自由に変更して構わない。

シナリオに変更を加える場合の注意点などを記載する。

舞台を変更する

シナリオの舞台となるのは『桜嶺女学院』となっている。これは帝都モノガタリにおいて他のシナリオ(『天球賛歌事件』など)にも登場する舞台となるため、使いにくいかもしれない。

小幡とら、真田幸以外の NPC は本シナリオのみの登場となるため、この二人を変更(名前だけでも)することで他の舞台への変更も容易になる。

時代を変更する

シナリオの時代を変更しようとした場合、大きな障害となるものはない。

現代としたとしても、『捜し求めるもの』がスマホや各種の記録媒体、通信手段にまで影響を及ぼすことができる(ノイズをかけてはつきりさせなくする程度でも)とすれば、現代に移しても大きな障害はないはずだ。

『桜嶺女学院』も女子高とすればよいので、舞台の変更にもそれほど苦労しないだろう。

『捜し求めるもの』を変える

このシナリオではシスター七瀬、月ヶ瀬七瀬が『捜し求めるもの』であったが、これを変更することも可能である。

『捜し求めるもの』に設定された NPC は最初に探索者達に表向きにされる情報に変わりはないが、実際の公式な情報は偽造か、偽装されたものであり、過去の経歴なども適当にでっち上げたうえで『捜し求めるもの』の強力な催眠攻撃(正確には催眠のような精神に影響を及ぼす攻撃だが)によって周囲の人間に信じ込ませ、補強していることになる。

特に情報の時系列、例えば四辻と庫子の関係性が描かれる場面などの過去にあったことなど、変更点を注意深く検討する必要がある(それも『捜し求めるもの』の催眠によって強く補正されている！とか、気まぐれでそういうふりをしていた、としてもよいが)。

参考資料、その他

本シナリオで主に参照した資料等を記載する。

- 暗黒神話大系シリーズ クトゥルー11、青心社
『深淵の恐怖』、ロバート・W・ロウンデズ、岩村光博訳

- 新クトゥルフ神話 TRPG、株式会社 KADOKAWA
- クトゥルフ神話 TRPG、株式会社 KADOKAWA
- クトゥルフ神話 TRPG クトゥルフと帝国、株式会社 KADOKAWA
- クトゥルフ神話 TRPG マレウス・モンストロルム、株式会社 KADOKAWA
いわゆる旧版の方。7版ではリストラされました…。

- 魔睡、森鷗外、青空文庫
https://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/58983_72484.html ※こちらで全文読めます。
- お嬢さまことば速習講座、監修加藤えみ子、ディスカヴァー21

- 『大正略字』フォント
表紙に使用している『大正略字』フォントは以下の URL よりダウンロード可能。
<https://booth.pm/ja/items/363104> ※フリーなのでぜひ、ご活用を！

- 帝都モノガタリ
<http://fgate.cyber-ninja.jp/index.html>

あとがき

またもや、7版でリストラ対象でした。なんてこった。

「6版のうちにやっておけ」、と言う話でもありますが、一体一体の厚みを増しているかわりに、マイナーな神格、クリーチャーの情報が失われるのは惜しく思います(まあ、旧版も持っているので今のところあまり困りませんが)。

『夜に来る』と同じく、登場作品が1作のみのマイナーなクトゥルフ神話的な存在ですが、こちらも短い原作の中にいろいろとクトゥルフ神話の設定を取り込んでおり、ユニークな存在であるのでぜひともシナリオにしたかった神格(?)です。

『天球賛歌事件』より前の桜嶺女学院を舞台にしたために、別の意味で少しやりづらいタイプのシナリオになっていますが、やりやすいように改変、膨らませてもらえればよいかと思えます。

奥付

発行日：初版 令和4年11月11日

発行：F.G./龍門亭 EDO-RAM(@EDO_RAMv200)